

損 益 計 算 書

〔自平成30年1月1日〕
〔至平成30年12月31日〕

(単位:百万円)

売 上 高		
完成工事高	93,606	
その他事業売上高	193	93,800
売 上 原 価		
完成工事原価	83,594	
その他事業原価	147	83,742
売 上 総 利 益		
完成工事総利益	10,012	
その他事業売上総利益	46	10,058
販売費及び一般管理費		5,120
営 業 利 益		4,938
営 業 外 収 益		
受取利息配当金	53	
収入地代家賃	49	
そ の 他	31	134
営 業 外 費 用		
支 払 利 息	90	
そ の 他	75	166
経 常 利 益		4,906
特 別 利 益		
固定資産売却益	126	126
特 別 損 失		
子会社株式評価損	102	
そ の 他	13	115
税引前当期純利益		4,917
法人税、住民税及び事業税	1,638	
法人税等調整額	△ 620	1,017
当 期 純 利 益		3,899

株主資本等変動計算書

〔自平成30年1月1日
至平成30年12月31日〕

(単位:百万円)

	株 主 資 本							
	資 本 金	資 本 剰 余 金		利 益 剰 余 金				利 益 剰 余 金 合 計
		資 本 準 備 金	資 本 剰 余 金 合 計	そ の 他 利 益 剰 余 金				
				特 別 償 却 準 備 金	別 途 積 立 金	圧 縮 積 立 金	繰 越 利 益 剰 余 金	
当 期 首 残 高	7,000	177	177	175	13,000	22	5,098	18,295
当 期 変 動 額								
当 期 純 利 益							3,899	3,899
特 別 償 却 準 備 金 の 取 崩				△ 29			29	—
別 途 積 立 金 の 積 立					5,000		△ 5,000	—
圧 縮 積 立 金 の 積 立								—
圧 縮 積 立 金 の 取 崩						△ 5	5	—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)								
当 期 変 動 額 合 計	—	—	—	△ 29	5,000	△ 5	△ 1,065	3,899
当 期 末 残 高	7,000	177	177	145	18,000	16	4,033	22,195

	株主資本	評価・換算差額等		純 資 産 合 計
	株主資本 合 計	その 他 有 価 証 券 評 価 差 額 金	評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	
当 期 首 残 高	25,472	1,376	1,376	26,849
当 期 変 動 額				
当 期 純 利 益	3,899			3,899
特 別 償 却 準 備 金 の 取 崩	—			—
別 途 積 立 金 の 積 立	—			—
圧 縮 積 立 金 の 積 立	—			—
圧 縮 積 立 金 の 取 崩	—			—
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)		241	241	241
当 期 変 動 額 合 計	3,899	241	241	4,140
当 期 末 残 高	29,372	1,617	1,617	30,989

個 別 注 記 表

〔 自 平成 30年 1月 1日
至 平成 30年12月31日 〕

1. 重要な会計方針

(1) 資産の評価基準及び評価方法

有価証券の評価基準及び評価方法

満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）によっている。

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法によっている。

その他有価証券

時価のあるものは期末日の市場価格等に基づく時価法によっている。（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないものは移動平均法による原価法によっている。

棚卸資産の評価基準及び評価方法

未成工事支出金

個別法に基づく原価法によっている。

材料及び貯蔵品

移動平均法に基づく原価法によっている。（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げ方法により算定）

(2) 固定資産の償却方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっている。（ただし、平成10年 4月 1日以降取得の建物、平成28年 4月 1日以降取得の建物附属設備及び構築物は定額法によっている。）

また、平成19年 3月31日以前に取得したものについては、償却可能限度額まで償却が終了した翌年から5年間で均等償却する方法によっている。

なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

また、取得価額10万円以上20万円未満の資産については3年均等償却によっている。

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっている。（ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっている。）

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっている。

(3) 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については過去の貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を考慮し、回収不能見込額を計上している。

賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額のうち当事業年度負担額を計上している。

完成工事補償引当金

完成工事に係るかし担保の費用に備えるため、当事業年度末に至る1年間の完成工事高に対し、過去3ヶ年の実績率による算定額を計上している。

工事損失引当金

受注工事に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末における未引渡工事の損失見込額を計上している。

退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産見込額に基づき計上している。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務年数以内の一定の年数（10年）による定率法により翌期から費用処理または費用の減額処理をすることとしている。

過去勤務費用の償却は、定額法（3年）により費用処理または費用の減額処理をすることとしている。

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準としている。

役員退職慰労引当金

役員（執行役員を含む）の退職慰労金の支給に備えて、内規に基づく期末要支給額を計上している。

(4) 収益の計上基準

完成工事高の計上基準

完成工事高の計上は、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用している。

(5) 消費税及び地方消費税に相当する額の会計処理の方法

税抜き方式によっている。

2. 貸借対照表関係

(1) 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をすることとしている。

(2) 有形固定資産の減価償却累計額 8,722 百万円

(3) 担保に供している資産及び担保付債務

担保に供している資産の内容及びその金額

機械・運搬具 409 百万円

投資有価証券 44 百万円

その他（投資その他の資産） 45 百万円

(4) 保証債務、手形遡及債務、重要な係争事件に係る損害賠償義務等の内容及び金額
該当なし

(5) 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

金銭債権 1,518 百万円

金銭債務 16,277 百万円

(6) 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権及び金銭債務	
該当なし	
(7) 親会社株式の各表示区分別の金額	
該当なし	
(8) 役員退職慰労引当金には、執行役員分145百万円が含まれている。	
3. 損益計算書関係	
(1) 工事進行基準による完成工事高	87,449 百万円
(2) 「売上高」のうち関係会社に対する部分	4,697 百万円
(3) 「売上原価」のうち関係会社からの仕入高	262 百万円
(4) 売上原価に含まれている工事損失引当金繰入額	1,768 百万円
(5) 関係会社との営業取引以外の取引高	198 百万円
(6) 研究開発費の総額	123 百万円
4. 株主資本等変動計算書関係	
(1) 事業年度末日における発行済株式の種類及び数	
普通株式	18 百万株
(2) 事業年度末日における自己株式の種類及び数	
該当なし	
(3) 事業年度中に行った剰余金の配当	
該当なし	
(4) 事業年度の末日後に行う剰余金の配当	
該当なし	
(5) 事業年度末において発行している新株予約権の目的となる株式の種類及び数	
該当なし	
5. 税効果会計	
繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳	
繰延税金資産	
退職給付引当金	1,487 百万円
有形固定資産評価損	70 百万円
投資有価証券評価損	32 百万円
工事損失引当金	546 百万円
子会社株式評価損	558 百万円
その他	363 百万円
繰延税金資産小計	3,059 百万円
評価性引当額	△ 186 百万円
繰延税金資産合計	2,873 百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	713 百万円
特別償却準備金	64 百万円
圧縮積立金	7 百万円
繰延税金負債合計	785 百万円
繰延税金資産の純額	2,088 百万円

6. 関連当事者との取引

(1) 親会社及び法人主要株主等

属性	会社等の名称	議決権の所有(被所有)割合	関係内容	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
親会社	(株)竹中工務店	被所有 直接 100%	建設工事の請負 資金の借入	建設工事の請負 (完成工事高)	4,697	完成工事未収入金	1,430
				建設工事の共同企業体	1,114	未収入金	60
				運転資金の借入	16,000	未成工事受入金	99
				運転資金借入に伴う支払利息	3	短期借入金	16,000

(注) 未収入金及び工事未払金とは、共同企業体として請負った工事の内、共同企業体代表者に対する債権債務相殺後の債権及び債務である。

また、上記金額のうち、取引金額及び未成工事受入金には消費税等が含まれておらず、完成工事未収入金、工事未払金及び未収入金には消費税等が含まれている。

取引条件及び取引条件の決定方針

建設工事の請負については、市場価格、総原価を勘案して各取引毎交渉の上、一般的取引条件と同様に決定している。

また、資金の借入に伴う利率については、市場金利を考慮して合理的に決定されるものである。

(2) 子会社及び関連会社等

属性	会社等の名称	議決権の所有(被所有)割合	関係内容	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
子会社	(株)竹中道路	所有 直接 100%	建設工事の発注 資金の受入	余剰資金の受入	6,400	—	—
				受入余剰資金の払出	6,400	—	—

取引条件及び取引条件の決定方針

余剰資金の受入に伴う利率については、市場金利を考慮して合理的に決定している。

7. 金融商品に関する注記

(1) 金融商品の状況に関する事項

① 金融商品に対する取組方針

当社は、資金運用については親会社である株式会社竹中工務店への預け入れによる安全な運用に限定して行っている。資金調達については親会社である株式会社竹中工務店及び銀行等金融機関からの借入により必要な資金を調達している。

② 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等は、顧客等の信用リスクがあるが、当該リスクに関しては、与信管理を徹底し、受注時に顧客の信用調査を実施し、また受注後も、信用状況を定期的に把握し、適切な債権保全策を実施する体制としている。

投資有価証券については、主に営業政策上保有している株式であり、市場価額の変動リスクがあるが、定期的に時価を把握している。

営業債務である支払手形・工事未払金等及び預り金は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。短期借入金は、主に運転資金の調達を目的とした変動金利の借入であり、金利の変動リスクがあるが、短期での借入であり、経営に与えるリスクは軽微であると判断している。また資金調達に係る流動性リスクについては、年度及び四半期の資金計画、月次の資金繰り計画を作成し管理している。

(2) 金融商品の時価に関する事項

平成30年12月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表に含まれていない。（(注2)参照）

	貸借対照表計上額 (百万円)	時 価 (百万円)	差 額 (百万円)
①現金預金	9,795	9,795	—
②受取手形・完成工事未収入金	51,073		
貸倒引当金(※1)	△24		
差引	51,049	51,049	—
③未収消費税等	6,770	6,770	—
④未収入金	7,688		
貸倒引当金(※2)	△4		
差引	7,684	7,684	—
⑤投資有価証券	4,276	4,276	—
資産合計	79,574	79,574	—
①支払手形・電子記録債務・工事未払金	24,203	24,203	—
②短期借入金	17,830	17,830	—
③未払金	552	552	—
④未払費用	317	317	—
⑤未払法人税等	881	881	—
⑥預り金	1,680	1,680	—
負債合計	45,463	45,463	—

(※1) 受取手形・完成工事未収入金に対して計上している貸倒引当金を控除している。

(※2) 未収入金に対して計上している貸倒引当金を控除している。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

①現金預金

預金はすべて短期であるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

②受取手形・完成工事未収入金、③未収消費税等、④未収入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

⑤投資有価証券

投資有価証券について、株式および債券は取引所の価格によっている。

負 債

①支払手形・電子記録債務・工事未払金、②短期借入金、③未払金、④未払費用、

⑤未払法人税等、⑥預り金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっている。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

種 類	貸借対照表計上額 (百万円)
非上場株式等	560
子会社株式	705
合 計	1,265

これらについては、市場価額がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積ることができず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「資産⑤投資有価証券」には含めていない。

8. 賃貸等不動産に関する事項

総額に重要性が乏しいため注記を省略している。

9. 一株当たり情報

(1) 一株当たり純資産額	1,721.65 円
(2) 一株当たり当期純利益	216.64 円

10. 重要な後発事象

該当なし